



だんぶり長者

ちようじや

むかし、^{あすきさわ} 小豆沢の ^{はたら} 働き者の ^{もの} 若者と、^{わかもの} 独鈷の ^{とっこ} 親孝行な ^{おやこうこう} 娘が、^{むすめ} いっしょに暮らしていた。ふたりともまじめに ^く 働き、^{しょうじきもの} 正直者だったが、^{せいかつ} 生活は ^{くる} 苦しかった。

ある年の正月、^{とし} 枕元 ^{しょうがつ} に ^{まくらもと} 大日如来 ^{だいにちによらい} が ^{あらわ} 現れた。
「もっと川上へ行き、^{かわかみ} そこに ^い 田畑 ^{たはた} をひらきなさい。

やがて、みんなにうやまわれるようになるだろう。」
ふたりは、^{だいにちさま} 大日様のおつげどおり、さらに川上へ行き、^{かわかみ} 田畑 ^い をひらく仕事を ^い 続けた。そんなある日、一匹の ^ひ だんぶり（とんぼ）が ^い 飛んできて、^{いわ} 岩の間 ^{あいだ} へ向かって ^む いった。ついて行ってみると、^い よいかおりの ^{いすみ} する泉 ^い が ^い わき出ていた。ふたりは、^{むらびと} 村人にもこの ^{いすみ} 泉 ^{みず} の水を ^い わけてやった。^{みず} 水を ^の 飲むと ^{びょうき} 病気が ^{なお} 治ると ^{ひょうばん} 評判 ^い になり、^{こや} ふたりの ^{おお} 小屋 ^{むら} のまわりは ^い 大きな ^{いえいえ} 村 ^い になった。家々の ^{こめ} 米 ^{みず} のとき ^{かわ} 水 ^{しろ} で川 ^よ が ^よ 白くなり、^よ 米白 ^よ （代）川 ^よ と呼ばれる ^よ ようになった。

やがて、^{わかもの} 若者 ^{むら} は ^{おさ} 村 ^{おさ} の長 ^{おさ} になり、「^{ちようじや} だんぶり長者」と ^{おさ} なった。

とっぴん ぱらりの ふう♪

『秋田のむかし話』（秋田県国語教育研究会編）しあわせになった話「だんぶり長者」参照